

## ダルマキールティ、シャーンタラクシタとウッドゥヨータカラ

——avayavin を巡って、*Vādanyāya* とその注釈 (VNV) との和訳研究——

森 山 清 徹

〔抄 録〕

ここに訳出しその哲学を把握しようとするテキストはダルマキールティの最後の著作とされる *Vādanyāya* (VN) 及びシャーンタラクシタによるその注釈 *Vādanyāya-vṛttivipaṇcitārtha* (VNV) である。そこでの論議とは、可視的な認識対象は〈1〉無区別 (単一) か、〈2〉有区別 (多) かとの選択支によりヴァーッヤーヤナを始めとするニヤーヤ学派は問いを発している。その場合、一なる対象なら諸部分 (avayava) とは別個な全体 (avayavin) が存在するに他ならず、また部分と全体とは和合関係 (samavāya) にあるとするニヤーヤ学派 (ウッドゥヨータカラと見られる) と、それに対して眼、対象、光、注意力などから眼識が生起するように多なるものが一なる結果を設ける (arthakriyākārin) のであり、また多様なものが話者の意図により簡潔に単一言葉で表現される故、全体という部分とは別の対象 (arthāntara) を想定する必要はないと立論するダルマキールティの見解が示される。以上のことはシャーンタラクシタの注釈により跡付けられるが、その注釈は独立した著作である『真実綱要 (TS)』『中観莊嚴論 (MAK, MAV)』に先立って著されたと考えられ、シャーンタラクシタの中観思想の形成過程を知る上からも極めて重要である。

**キーワード** 部分と全体、ウッドゥヨータカラ、ダルマキールティ、*Vādanyāya*、シャーンタラクシタ

上の要旨に表した通りダルマキールティの VN とシャーンタラクシタのその注釈 (VNV) を通じ明らかにしたいことは、以下の三点である。

- 1.そこでのダルマキールティ (c. 600-660) の論述は主にヴァーッヤーヤナ、ウッドゥヨータカラ (Uddyotakara c. 550-610) による反論に答論するものと考えられること。
- 2.シャーンタラクシタは、*Tattvasaṃgraha* (TS), *Madhyamakālaṃkāra* (MK), MK-*vṛtti* (MAV) に先だって VNV で全体と部分とを、またグナ (guṇa) とグニン (guṇin) とを区別するウッドゥヨータカラの理論を論破する方式を樹立し、その後の離一多性因による無自性論

証の確立へと活かしたのであろうこと。

3. 部分と全体、グナとグニンとに関するニヤーヤ学派と仏教との論議を表す箇所<sup>3</sup>のダルマキールティの VN とそれへのシャーンタラクシタの注釈（VNV）との訳出。

1. ダルマキールティが VN において論議する対論者とは、ニヤーヤ学派のウッドゥヨータカラであると考えられる点を中心に吟味する。以下のものと訳文の冒頭に示した対論者の主張からは多なるものと一なるものとの関係を問う点で、言葉の対象（padārtha）として個々のものの独立した実在性を認め、一なるものは多とは別な対象（arthāntara）であるが、多と一は和合（samavāya）する関係にあると見るニヤーヤ学派の見解であると知られる。それに対して眼、対象、光、注意力などが眼識を生起するように多なるものが相互に関係し合い一なる結果を設けること（ekārthakriyākārin）という仏教の縁起に基づくダルマキールティの見地が対峙している。その焦点は多と一との関係を論じる文脈において部分（avayava）と全体（avayavin）及びグナとグニンとの結びつきを表すのに和合（samavāya）を主張し、またそれぞれ両者が別の対象（arthāntara）であるとするニヤーヤ学派の見解にある。この二点を取り分けウッドゥヨータカラの主張と一致する。また訳文に示した通りシャーンタラクシタの VNV pp. 27, 25-28, 6 最初部分の〔反論〕における一なるドラヴィヤを把握する知の対象は〈1〉多様であるのか〈2〉無区別（単一）であるのかという選択支のうち〈2〉を正統とし、その限り全体（avayavin）が要請されるとするものは、ヴァーッヤヤーナ及びウッドゥヨータカラの本稿1.2.a.に示した NBh, NV の〈1〉〈2〉に一致している。したがってシャーンタラクシタは、ヴァーッヤヤーナ及びウッドゥヨータカラの見解を〔反論〕として取り上げていると知られる。このことと後に言及するシャーキャブッディの言明とから、多と一との観点から部分と全体との問題に関しダルマキールティは、ウッドゥヨータカラの見解を取り上げていると知られる。まず、第一に和合（samavāya）、第二に別の対象（arthāntara）に関してダルマキールティが言及することを示せば、

#### 1.1. 和合（samavāya）

VN p. 6, 10-11, P1, 367b6, D329a3

nānāviṣayatve 'pi ekatropasamhāras tannimittānān tatra samavāyād iti cet

〔反論〕一つのものにおいて集結するもの（upasaṃhāra）が多様な対象であっても、その諸の特徴をもった（可視的な）ものには、そこ（色など）において和合すること（samavāya）があるから。

シャーンタラクシタの注釈、VNV p. 26, 6-8, P1, 44b7-8, D70b7-71a1

kaṇabhakṣākṣapādamatānusāriṇas tu mithyādarśanānurāgajanitāsadvikalpamalopaliptāntarlocanāḥ sañcakṣate nānāviṣayatve 'py abhyupagamyamāne teṣāṃ ekatropasamhāro 'viruddha eva tannimittānām (VN p. 6, 10) sanidarśanādinām tatra rūpādaḥ samavāyād iti /

一方、誤った見解に愛着 (anurāga) を起こして正しくない分別によって汚された (upalipta) 内なる眼 (locana) をもっているカナード (kaṇabhakṣa) とアクシャパーダ (akṣapāda, rkaṇ mig) との思想にしたがっている者 (anusārin) たちは、全く矛盾のない一つのものにおいて集結するもの (upasaṁhāra) が、多様な対象として承認されているとしても、それら諸のその動力因 (nimitta) をもった可視的なもの (sanidarśana) などには、そこすなわち色などにおいて和合することがあるからと考える。

このシャーントラクシタの注釈からダルマキールティが和合を主張する者としてカナードとニャーヤスートラを著したアクシャパーダとに従う者を想定していると知られる。そこで、この一なるものが多なるものに和合するという見解はウッドゥヨータカラに見出される。

NV p. 1050, 11-13 *ad* NS 4.2.12 ekaṁ cānekatra vartate iti pratijñāno nānuyoktavyaḥ, ubhayena vyāghātād ity uktam / yady avayaviṇaikaśā vartate na kārtsnyena vartate atha katham vartata iti vṛttir avayaveṣu āśrayāśrayibhāvaḥ samavāyākhyāḥ sambandhaḥ / また、一なるものが多なるものに存在する (vartate) と主張する者は [全体は諸部分に総体として、あるいは一部分として存在するのかと] 詰問される必要はない。両者共に矛盾 (vyāghāta) があるからと述べられている。

[反論] もし、全体 (avayavin) が一部分 (ekadeśa) として存在せず、総体 (kārtsnya) としても存在しないなら、その場合、[全体と部分とは] どのような仕方で存在するのか。

[答論] 諸部分に関する存在関係 (vṛtti) は依存するもの (āśraya) (部分) と依存されるもの (āśrayin) (全体) との関係、すなわち [一なるものが多なるものに関して] 和合 (samavāya) と呼ばれる結合関係 (sambandha) にあるのである<sup>(1)</sup>。

この [答論] の下線部は、注に示したカマラシーラが TSP *ad* TS 611冒頭でウッドゥヨータカラと指示するものに等しい。これは、一なる全体と多なる部分とが総体として和合するか、部分 (ekadeśa) として和合するかという和合の仕方、存在関係 (vṛtti) を問うものであり、後の VNV (p. 30, 3-13) の訳文に示す通りものとまさしく論点が一致する。

以上からウッドゥヨータカラは一なるものが多なるものに和合 (samavāya) することを全体と部分との存在関係 (vṛtti) と表明していることが知られる。

ダルマキールティが、ウッドゥヨータカラの論難に答えているものは他にも見出し得る。個々の原子は超感覚的であるから、積集しても知の対象にはならない、との詰問に対して、ダルマキールティは PVIII223<sup>(2)</sup>で、卓越性 (atiśaya) の生じた多なる原子が知の対象である、と答えている。先の詰問をデーヴェンドラブッディも挙げ<sup>(3)</sup>、その詰問者をシャーキャブッディは、Uddyotakara<sup>(4)</sup>であるとしている。

## 1.2. 別の対象 (arthāntara)

### 1.2.a. 部分 (avayava) とは別な対象としての全体 (avayavin)

ヴァーッヤヤーナとウッドゥヨータカラとが部分と全体とが別であることを主張する点をシ

シャーンタラクシタは、VNV で制作者が区別されることを始めとし、八点の論拠（因）を挙げ示している。その中の一部はウッドウョータカラのものと一致し、またシャーンタラクシタ自身の TS とカマラシーラによる TSP のものと一致するものを見出し得る。VNV ではグナと別な対象としてのグニンに関しても部分と全体に関するものに続いて扱われている。

NBh. pp. 499,1-500,3 *ad* NS 2-1-35 athāvayavinam̐ pratyācakṣāṇako mā bhūt pratyakṣalopa ity aṇusañcayaṁ darśanaviṣayaṁ pratijñānaḥ kim anuyoktavya iti / ekam idaṁ dravyam ity ekabuddher viṣayaṁ paryanuyojaḥ kim ekabuddhir <1> abhinnārthaviṣayeti āhosvit <2> bhinnārthaviṣayeti / <1> abhinnārthaviṣayeti cet arthāntarānujñānād avayavisiddhiḥ / <2> nānārthaviṣayeti cet bhinneṣv ekadarśanānupapattiḥ anekasminn eka iti vyāhatā buddhir na dṛśyata iti //

もし、全体 (avayavin) を否定する者が「対象が」直接知覚されないことを避けるために、原子の集合 (aṇusañcaya) を認識の対象であると主張する者（世親）<sup>(5)</sup> は詰問されなくてはならない。このドラヴィヤ (dravya) は単一であるから一なる知 (buddhi) の対象として一なる知は <1> 無区別（単一）なものを対象としてもつ (abhinnārthaviṣaya) のか、あるいは <2> 区別される（多様な）ものを対象としてもつ (bhinnārthaviṣaya) ののであるかと詰問されなくてはならない。[一なる知は] <1> 無区別なもの（一）を対象としてもつというなら別の対象 (arthāntara) を承認することになるから、全体 (avayavin) が成立する。<2> 多様な（区別される）ものを対象としてもつ (nānārthaviṣaya) というなら、諸の区別あるもの（多）に関して一（無区別）を見ることは妥当しないことである。多に関して一という矛盾した知は経験されないからである。

上のサンスクリット文の下線部をウッドウョータカラは以下の通り解釈している。

NV p. 500,10-14 *ad* NS 2-1-35 yeyam̐ buddhir ekam idaṁ dravyam iti (NBh. p499,3) kim iyaṁ <2> nānāviṣayā <1> utābhinnaviṣayeti / yadi <2> nānāviṣayā, bahuṣv adarśanād ayuktā na ca bahuṣv ekam idaṁ iti yuktaḥ pratyayaḥ / <1> athābhinnārthaviṣayā, yo 'sāv ekabuddher viṣayaḥ so 'vayavīti / ekānekabuddhī bhinnaviṣaye viśeṣavattvād rūpādiviṣayabuddhivad iti / athavā ekānekabuddhī bhinnaviṣaye samuccitāsamuccitaviṣayatvāt idaṁ iti yathā idaṁ cedam̐ ceti yathā //

このドラヴィヤ (dravya) は単一であるからこの知 (buddhi) は <2> 多様な対象を有するもの (nānāviṣaya) であるのか、<1> あるいは無区別な対象を有するもの (abhinnaviṣaya) であるのか。もし <2> 多様な対象を有するもの (nānāviṣaya) であるなら、多に関して [一は] 見られないから、不合理である。また、[全体を認めない汝にとって] 多に関してこの一が存在するというのは正しい知ではない。あるいは <1> 無区別なものを対象とする (abhinnārthaviṣaya) のなら、一なる知 (ekabuddhi) にとってこの対象であるものが全体 (avayavin) である<sup>(6)</sup>。

(宗) 一と多との知 (ekānekabuddhi) は区別された対象 (bhinnaviṣaya) を有する。

(因) [一と多との知は] 特殊性を具えている (viśeṣavattva) からである。

(喩) [一なる壺や布とは別な] 色などの対象に関する知 (多) のように。

(宗) 一と多との知は区別された対象を有する。

(因) [一と多との知は] 積集した (一)、積集していない (多) 対象性があるから。

(喩) [前者は] これといい、[後者は] これとあれというように。

ウッドウョータカラによる部分と全体との区別の証明

NV p. 513, 8-10 *ad* NS 2-1-36 arthāntaram paṭāt tantavaḥ taddhetutvāt turyādivad iti /  
turyādipaṭākāraṇam arthāntaram iti dṛṣṭam, tathā ca tantavaḥ, tasmād arthāntaram iti /  
sāmarthyabhedād viśāgadavat, bhinnapratyayaviśayatvād rūpasparśavat / tantupaṭarūpe  
bhinnakāraṇe viśeṣavattvād rūpasparśavat /

(宗) 諸の糸は布とは別の対象 (arthāntara) としてある。

(因) その原因性の故に。

(喩) 杼 (turi) などのように<sup>(7)</sup>。

杼 (turi) などの布の原因は [諸の糸の原因とは] 別なものであると知られる。同様にまた諸の糸 [の原因] は、それ (布の原因) とは別なものとしてある。

[ (宗) 諸の糸は布とは別の対象としてある。 ]

(因) 効力 (sāmarthya) の区別の故に<sup>(8)</sup>。

(喩) 毒 (viṣa) と薬 (agada) のように。

[ (宗) 諸の糸は布とは別の対象としてある。 ]

(因) 区別された知識の対象性の故に。

(喩) 色と触のように。

(宗) 糸と布の色 (rūpa) は区別された原因をもつ。

(因) 特殊性をもつ故に。

(喩) 色と触のように。

1.2.b. 多なるグナとは別な対象 (arthāntara) としての一なるグニン——第六格 (属格) の使用を根拠とするニヤーヤ学派の見解

ウッドウョータカラによっては、全体という部分とは別の対象 (arthāntara) が第六格 (属格) で表されること、それはまたグナとグニンとの区別の根拠とされる。それに対して仏教側は第六格の使用は別の対象であることを示す根拠とはならないと一貫して否定している。この一貫性を示すために、まずヤショミトラによる論述を挙げておく。これは、訳出したシャーンタラクシタの VNV のものと一致している。さらにシャーンタラクシタは否定の根拠をダルマキールティの PVSV vv. 65-66によって論じ、また自身の TS 570にも反映させている<sup>(9)</sup>。

AKv p, 180, 24-30 *candanasya gandhādayaḥ śilāputrakasya śarīram iti. anarthāntarabhāve*

'pi śaṣṭhinirdeśaḥ kriyate. gandhādisamūhamātraṁ hi candanam iti Bauddhasiddhāntaḥ. Vaiśeṣikasiddhāntāpekṣayā tu asiddhaś candana ity aparo dr̥ṣṭānta upanyasyate. *śilāputrakaśarīrayor Vaiśeṣikāṇām* api siddhānte nārthāntarabhāvo bhavati ca śaṣṭhinirdeśaḥ. arthāntaraparikalpakṛto hi tathā nirdeśaḥ.

〔例えば〕白檀の香りなどや胸像の身体である。別の対象 (arthāntara) が存在していなくとも、第六格 (śaṣṭhī) によって表すことがある。なぜなら、白檀は香りなどの集合 (samūha) に過ぎない（白檀の香りと第六格で表現されていても、白檀と香りなどは別ではない）というのが仏教の学説である。他方、ヴァイシェーシカの学説によると〔香りなどの集合としての〕白檀は成立しないから、他の喩例が設定される。〔それが〕胸像の身体である。胸像と身体との二は、ヴァイシェーシカの学説に関しても、また第六格で表されているもの（部分と全体と、同様にグナとグニンと）が別の対象 (arthāntara) としてあるのではない。なぜなら、（色の生起の場合と）同様に別の対象を構想することにより設けられた表現（色の住 sthiti など）がある。

このヤショミトラの論述と反対にグナ（色、味、香、触）とグニン（白檀）との区別を第六格が使用されることを根拠にウッドウョータカラは論じる。

NV p. 370, 3-5 *ad* NS 1-2-4 vyadhikaraṇaviśeṣaṇānām udāharaṇam—rūpadiśabdāś candanaśabdād atyantā (a ?) bhinnārthāḥ samudāyasamudāyyasambhava sati tena vyapadeśāt / etad eva vyadhikaraṇaviśeṣaṇaviśeṣasyodāharaṇam viparyayaḥ /

諸の異なった主題を限定するもの (viśeṣaṇa) の例 (udāharaṇa) は、

（宗）色など（味、香、触）の言葉は、白檀という言葉とは全く区別される対象である。

（因）複合体 (samudāya) と成分 (samudāyin) としてあり得ないもの（色など）が存在している場合、〔色などの言葉が〕それ（白檀という言葉）によって（白檀の色などと第六格により）表されるから。

これこそが、誤解して〔グナとグニンとは区別されないとすることに対する〕異なった主題に関して限定するものと限定されるもの (viśeṣaṇaviśeṣya) の〔関係がある〕例である<sup>(10)</sup>。

1.2.c. 第六格の使用を根拠とする部分（糸）と別な対象として全体（布）を論じるウッドウョータカラの見解

NV p. 479, 8-12 *ad* NS 2-1-33 idaṁ tāvad yathāśruti vākyaṁ hetuhīnam / na hy atra hetur astīti / nanu copanayena vyajyamāno hetur avayavatvam asti, nārthāntaram paṭāt tantavaḥ tadavayavatvād iti na, vyāghātāt / anarthāntarabhāve nāvayavatvaṁ sidhyati tantūnām iti / kiṁ kāraṇam avayavyapekṣatvāt avayavyapekṣo 'vayavaḥ, na cāvayavi-pratyākhyāne 'vayavatve kiñcid bijam asti / arthāntare ca darśanād viruddhaḥ syāt / dr̥ṣṭo 'vayavo 'rthāntarabhāve nānarthāntarabhāva iti /

まず、これ（布は諸の糸とは別の対象 <arthāntara> ではないという主張）は規則によれば因 (hetu) が欠如しているといわれなくてはならない。なぜなら、この（布は諸の糸とは別の



対象ではないという主張の) 場合、因が存在しないからである。

〔反論〕<sup>(11)</sup>しかし、適用 (upanaya) によって顕わされている因が〔布の〕部分性 (avayavatva) として存在する。

(宗) 諸の糸は布とは別の対象 (arthāntara) ではない。

(因) 〔諸の糸は〕それ (布) の部分であるからである (tadavayavatvāt)。

〔答論〕〔以上の推論は正しいものでは〕ない。〔同一なものに部分は成立しない故、因は〕矛盾 (vyāghāta) しているからである。諸の糸が〔布と〕別の対象 (arthāntara) でなければ、部分性 (avayavatva) は成り立たない。

〔反論〕何故であるか。

〔答論〕全体に依存しているからである。部分は全体に依存しているものである。また、全体が否定 (pratyākhyāna) されている際の部分性に関して、いかなる根拠 (bija) もない。また、別の対象 (arthāntara) に関して〔部分が〕見られるから〔別の対象でない場合に部分が存在するという汝の因には〕矛盾 (viruddha) が存在する。別の対象 (arthāntara) が存在している場合に部分は見られるが、別の対象が存在していない場合には〔部分は見られ〕ない。  
NV p. 479, 12-16 *ad* NS 2-1-33 yathā tantavo 'vayavā ghaṭād arthāntaram iti śaṣṭhivīṣeṣaṇād aprasaṅga iti cet paṭasyāvayavā ity ukte ghaṭādiṣu kaḥ prasaṅgaḥ nanv atroktam / kim vyāghātād iti / na hy anarthāntarabhāve avayavo 'sti, na ca śaṣṭhī / na ca tantus tantor avayavaḥ, nāpi śaṣṭhyarthaḥ, tantos tantur avayava iti / utpattiyā 'vayavatvaṁ tantūnām, tasya nānvayo na vyatireka iti asādhāraṇatvād hetuḥ /

〔反論〕例えば、部分である諸の糸は壺とは別な対象 (arthāntara) としてあるということは第六格 (śaṣṭhī) という限定詞により表現されることではない (aprasaṅga)。布の諸部分 (paṭasyāvayavāḥ)<sup>(12)</sup>といわれる際、壺などに関して〔第六格によって〕表現されるのであるか。

〔答論〕このことに関しては、述べ終わっている。

〔反論〕〔汝は〕何をいわんとするのであるか。

〔答論〕〔因が〕矛盾している (vyāghāta) からであると〔述べ終わっている〕。

なぜなら、〔汝の主張通り部分とは〕別の対象 (arthāntara、全体) が存在しない場合、部分 (avayava) は存在しない。また〔別の対象でなければ〕第六格 (śaṣṭhī) も存在しない。また糸は糸の部分ではない。糸は糸の部分であるという第六格の対象 (śaṣṭhyartha) でもない。諸の糸に部分性が起こる故に、それ (全体) には〔部分の有無に関して〕肯定 (anvaya) もなく否定 (vyatireka) もない故、因 (その部分であること) は共通しないもの (asādhāraṇatva 不共不定因) であるから<sup>(13)</sup>。

1.2.d. 特殊な状態にあることとは全体という別な対象 (arthāntara) との結合 (saṁyoga) であるとするウッドウョータカラの見解

これは、シャーンタラクシタの VNV で、部分とは別な対象としての全体を刹那滅を論拠と

して論難する際、活用されていると思われる。

NV p. 480,5-10 *ad* NS 2-1-33 *naiva hi naḥ kiñcin nirvartyam asti, ta eva tantavaḥ saṁsthānaviśeṣāvasthitāḥ paṭākhyāṁ labhanta iti apaṭākhyās tantavaḥ paṭaśabdenābhīḥyanta ity uktāṁ bhavati / etac ca viruddham, mukhyāsambhavāt / na hi tantūnām apaṭānām paṭena kiñcit sāmānyam asti / na cāsati sāmānye mithyāpratyayasya bījam astīty uktam / yac cedam ucyate saṁsthānaviśeṣāvasthānam iti, kiṁ tad arthāntarabhūtam āho neti yady arthāntarabhūtam, kiṁ tad iti vaktavyam / atha nocyate śūnyāṁ tarhi idaṁ vākyaṁ saṁsthānaviśeṣāvasthānam iti / asmākaṁ tu saṁsthānaviśeṣaḥ saṁyogaḥ sa cārthāntaram /*  
 [反論] なぜなら、我々（仏教徒）にとって何らかの生起されるもの（別の対象）は全く存在しない。特殊な状態にある（saṁsthānaviśeṣāvasthita）その同じ諸の糸が布という名称を得るのである。布という名称をもたない諸の糸が、布という言葉によって呼ばれるのであるといわれている<sup>(14)</sup>。

[答論] しかしながら、これは矛盾（viruddha）である。主要点があり得ないからである。なぜなら、布ではない諸の糸に布と何らの共通性（sāmānya）もない。また、[布と諸の糸に] 共通性が存在しない場合、誤った知識には根拠（bija）が存在しないといわれる。また、この「諸の糸が」特殊な状態にあること（saṁsthānaviśeṣāvasthita）がいわれる。これ（諸の糸が特殊な状態にあること）は、[1] 別の対象となっているもの（arthāntarabhūta）であるのか、あるいは[2] そうでない（別の対象でない）のであるか。もし[1] 別な対象となっているものであれば、それは、何であるのかといわれなくてはならない（部分である諸の糸とは別な対象である全体としての布に他ならないではないか）。もし[2] そうでない（別の対象でない）のなら、この特殊な状態になっていることとは、無意味な（śūnya）ことであるといわれなくてはならない。一方、我々にとって特殊な状態とは結合（saṁyoga）であり、それ（糸）が別の対象（arthāntara 布）となっていることである。

2. シャーンタラクシタが、TS, MAK, MAV を著すに先立って、VNV を著したであろうことは、まずダルマキールティのVNを注釈することにより自身の哲学を形成し、その後の独立した著作であるTS, MAK, MAVを著す際に活かしたものであると思われる。VNVのものは、TSとも著しく一致し、それは次の点に見られる。すなわち部分と全体との別を論じる主にウッドゥヨータカラ説を和合（samavāya）という存在関係（vṛtti）を問う面から論難し、またグナとグニンとの別であることを第六格の使用の面から論じる同じくウッドゥヨータカラ説をPVSV 65,66を根拠に論難する点である。このVNVとTSとの一致は、以下の訳注に示す。

### 3. 和訳研究

I.ダルマキールティによる別の対象（全体）の吟味、II.認識因果論、言語論（多→一）を根



拠とする全体不要論

VN p. 6, 19-23 P1, 368a1-3, D329a5-6 ghaṭa ity api ca rūpādaya eva bahava ekārthakriyā-kāriṇa ekaśabdavācya bhavantu kim arthāntarakalpanayā. bahavo 'pi hy ekārthakāriṇo bhaveyuś cakṣurādivat. tatsāmarthyasthāpanāya tatraikaśabdaniyogo 'pi syād iti yuktaṁ paśyāmaḥ.

I. また壺というものも、一なる言葉 (ekaśabda) により指示される一なる結果を設ける (ekārthakriyākārin) 多なる色など [の集合] に他ならないのなら、[壺は多なる色とは] 別の対象 (arthāntara)<sup>(15)</sup> であると構想して何になろうか。なぜなら、II. 多なるものも一なる結果を設けるもの (ekārthakārin) である。眼など [が単一な眼識を設けるのであり眼などと眼識とは別ではないこと]<sup>(16)</sup> のように。その (多なる色などの) 効力を確定するために、それ (多なる色) に一なる言葉 (ekaśabda) (例えば布) が結びつくことも (api) あろうということとは道理に適っていると我々は見る。

VNV p. 27, 25-28, 6 P 46a8-47a1 D72a5-b4 I .A. evaṁ tāvat parapakṣanirākaraṇena sanidarśanādiśabdānām abhinnaviśayatvaṁ sādhitam / ta eva jaḍimnaḥ padam udvahantaḥ punar api paryanuyuñjate nanu bhavatu nāma sanidarśanādiśabdānām <1> abhinnaviśayatvam / <2> atha katham avasiyate ghaṭapaṭādiśabdānām anekārthaviśayatvam iti yāvatā rūpādivyatiriktam anyad evāvayavidravyam asti tad eva ca ghaṭapaṭādiśabdair viśayikriyate / tathā hi vicāraṇiśayāpannaḥ paṭas tantubhyo vyatiricyate 1) bhinnakartṛkatvāt ghaṭādivat / tathā 2) samastavyastapratyayāviśayatvād gavādivat / na hi tantavaḥ tantusamudāya iti vā paṭe pratyayo duṣṭaḥ 3) upāyāntarasādhyatvāc ca ghaṭādivat / 4) bhinnadeśāvasthiteś ca 5) kriyamāṇatvāt ghaṭādivat eva / 6) bhinnaparimāṇatvāc ca vakulāmalakabimbādivat / ataś ca 7) pūrvottarakālābhāvitvād bijāṅkurādivat / atha vā paṭād anye tantavas tatkāraṇatvāt turyādivat / tantupaṭayor vā 'nyatvaṁ 8) bhinnasaktimatvāt jalānalādivat / I .B. tathedam aparaṁ vicāraṇiśayāpannam indivaraṁ gandhādibhyo 'tyantabhinnaṁ teṣāṁ vyavacchedakatvāt caitrādivat / iha yad yasya vyavacchedakaṁ tat tasamān anyat tad yathā gopiṇḍāc caitraḥ ity etāni tadvyatirekasādhanapramāṇāni santi /

I .A. [ニヤーヤ学派による部分 (糸) と全体 (布) とは別であることの証明]

以上のように、まず他者の主張を退けること (nirākaraṇa) によって諸の可視的なもの (sanidarśana) [多なる色] などの言葉にとって無区別 (単一) な対象性 (abhinnaviśayatva) が証明される。愚かさ (jaḍiman) から [部分と別な全体という] 言葉 (pada) を語っている彼らこそが、さらに詰問する。

[ヴァーッヤーヤナとウッドゥヨータカラによる反論]<sup>(17)</sup> [汝にとって] 可視的なもの (sanidarśana)<sup>(18)</sup> [認識対象] などの諸の言葉にとって <1> 無区別な対象性 (abhinnaviśayatva 単一なもの) があるのか。また <2> [有区別 (多様) なら] どうして [単一な] 壺と布

などの言葉にとって多なる（有区別な）対象の対象性（anekārthaviṣayatva）が確定されるのか、という限り〔〈1〉諸の言葉にとって無区別（単一）な対象性が証明されるなら〕、〔多なる〕色などとは異なり（vyatirikta）全く別である〔壺や布などの単一な〕全体というドラヴィヤ（avayavidravīyam）が存在する。また、それ（全体というドラヴィヤ）こそが壺や布などという言葉によって対象とされる。というのは、

（宗）吟味の対象となっている（vicāraṣayāpanna）布（全体）は諸の糸（部分）と区別される。

（因）1）制作者性（kartṛkatva）が区別される故に<sup>(19)</sup>。

（喩）布と<sup>(20)</sup>壺などのように。同様に、

〔（宗）布と糸とは別である。〕

（因）2）布も共通性（sāmānya）<sup>(21)</sup>〔布性〕と特殊（viśeṣa）<sup>(22)</sup>〔布でないものとの相違〕とに関する知の対象である故に<sup>(23)</sup>。

（喩）〔馬などと相違する〕牛（gava）などのように。

なぜなら、布に関して諸の糸（tantu）あるいは糸の集合（samudāya）という知は起こらない<sup>(24)</sup>。

〔（宗）布と糸とは別である。〕

（因）3）別の方法で完成される故に<sup>(25)</sup>。

（喩）壺などのように。

〔（宗）布と糸とは別である。〕

（因）4）異なった場所に位置する故に。5）作られている故に。

（喩）まさしく壺などのように。

〔（宗）布と糸とは別である。〕

（因）6）異なった分量性（parimāṇatva）の故に<sup>(26)</sup>。

（喩）ヴァクラ樹（vakula）とアーマラカ樹（āmalaka）とビンバ樹（bimba）等のように

〔（宗）糸と布とは別である。〕

（因）7）前後の時間（pūrvottarakāla）に存在している故に<sup>(27)</sup>。

（喩）〔先にある〕種子と〔後に存在する〕芽などのように。あるいは、

（宗）諸の糸（部分）は布（全体）とは別である。

（因）それらの原因性（kāraṇatva）の故に。

（喩）織物師の杼（turi）などのように<sup>(28)</sup>。

（宗）糸（部分）と布（全体）とは別異性がある。

（因）8）異なった能力を有しているからである（bhinnaśaktimatvāt）<sup>(29)</sup>。

（喩）水（jala）と火（anala）などのように。

I.B.〔ニヤーヤ学派の推論によるグナとグニンとの区別の証明、青蓮華の香と第六格で表現されるから、青蓮華と香りなどとは別々である〕同様に、また

（宗）吟味（vicāra）の対象となっている青蓮華（indīvara）は香などと全く別なもの（bhin-

na) である。

(因) それら (青蓮華と香りなど) には排除しあう性質があるからである。(喩) チャイトラ (caitra, nag pa) とアルジュナ<sup>(30)</sup> など [とが別である] のように<sup>(31)</sup>。

この場合、あるものが、あるものを排除する (vyavaccedaka)。それは、それと別なものである。例えば、牛の食べ物 (gopiṇḍa) とチャイトラとは [別であるように]。したがって、これらのものがそれ (無区別でであれば必ず同質である) の否定的遍充 (vyatireka) を証明する諸のプラマーナである。

I .A'. [シャーンタラクシタによる答論] VNV p. 28,6-16 P 47a1-6 D72b4-73a1 tat kat-haṁ teṣāṁ bhinnaviṣayatvaṁ bhaviṣyatiti / tad etad apy eṣāṁ asaddarśanābhiniveśapaṭ-alapracchādītāntaḥkaraṇānāṁ nālpiyasas tamaso durvilasitam ity āgūryāha ghaṭa ity api ca rūpādaya evaikārthakriyākāriṇa ekaśabdavācyā bhavantu kim arthāntarakalpanayeti (VN p. 6,19-20) / kāryam ity upaskriyate / naiva kiñcit tasya tādṛśasya nīlādivyatirekeṇ ānupalakṣaṇād ity ākūtam asya / yāni tv etāni tat pratipādanāya pramāṇāny uktāni, tāny asiddhatādidoṣaduṣṭatvān nālaṁ tadbhedasādhānāyeti bhūtānāṁ eva purataḥ chāyāṁ dadhatiti manyate / tathā hi nedaṁ tāvad ādyaṁ pramāṇaṁ parikṣyamāṇaṁ pūrvāṁ api parikṣāṁ kṣamate / yato 'tra vikalpadvayam āvirbhavati [1'] anyāvasthāvasthitebhyo vā tantubhyaḥ paṭasyānyatvaṁ sādhyate, [2'] viśiṣṭasaṁsthānāvasthitebhyo veti /

[答論] それが、どうして、それら (糸と布と) に区別された対象性があることをもたらすのであるか。誤った見解への執着である薄皮 (paṭala, liṅ tog) によって覆われた思考器官 (antaḥkaraṇa, mun pa, andhakāra 闇) の大きな (na-alpiyas) 闇 (tamas) から起った誤った行為 (durvilasita) であると認めて答えた。壺というものも、また一なる効果的作用を設ける一なる言葉により指示される多なる色などに他ならないなら、[壺は多なる色とは] 別の対象 (全体) であると構想して何になろうか (VN p. 6,19-20) と。[一なる効果的作用は多に対する] 結果 (kārya) であると整えられる。その類のものは知られない (anupalakṣaṇa) から、青などとは別に何らのものも全く存在しないということがこのことの意図である。一方、それ (青などと別のものである全体が存在すること) を理解させるために [対論者によって] これら諸のプラマーナが述べられた。不成 (asiddhatā)<sup>(32)</sup> などの過ちによって害されているから<sup>(33)</sup>、[立証因は] それらの (糸と布との) 区別 (bheda) (別であること) を証明するためではあり得ない。愚かな思いこそが先に意図されている<sup>(34)</sup>と考えられる。というのは、まずこの考察されている第一のプラマーナ [糸と布は別である。1) 制作者が異なる故に]は、微細な<sup>(35)</sup>考察に耐えない。なぜかといえば、この場合、二なる選択支が明らかに存在する。

[1'] 別の状態にある (anyāvasthāvasthita) 諸の糸 (部分) とは布 (全体) は、別であることが証明されるのか、あるいは [2'] 特殊な状態にある (viśiṣṭasaṁsthānāvasthita)<sup>(36)</sup> [諸の糸] とは [布は別であると証明されるのかである]。

VNV p. 28,16-24 P 47a6-b2, D73a1-5 tatra na tāvad ayam [1'] ādyaḥ prakāraḥ saḥate vicārabhāragauravam siddhasāadhanatādoṣāṅgāt / yasmāt samadhigatasamastavast-uyāthātathyasugatasamayanayasamāśrayapravṛttibalāsādītāvadātamatayaḥ prasavānant-aranirodhabhājaḥ sarvabhāvāḥ iti prakalpayanti / tataś ca tebhya 'nyatvam iṣṭam eveti siddhasādhyatāprasaṅgopanipātapiśācaḥ katham iva bhavantaṁ na gr̥hṇāti / [2'] dvitīyo 'pi vikalpaḥ tivrānalopatapta ivopalatale talāni pādānāṁ na pratiṣṭhāṁ samāsādayati, hetoḥ paraṁ praty asiddhatvāt / na hi viśiṣṭasthānāvasthitebhyaḥ apaṭasya bhinnakartṛkatvaṁ paraṁ prati siddhapaddhatim avatarati / yo hi tādṛkprakārebhya 'nyatvam abhāvād eva nābhypaiti sa katham iva bhinnakartṛkatvam abhyupagamiṣyatiti /

その場合、まず [1'] この第一のあり方 [別な状態にある諸の糸とは布は別である場合] は、吟味の重荷による困難 (vicārabhāragaurava) に耐え得ない。すでに証明されたものを証明するという過失 (siddhasāadhanatādoṣa) に捕らわれているから、なぜかという、獲得された全ての事物の真実 (yāthātathya) を正しく知る (samadhigata) 如来の教え (samaya) の方法 (naya) に依存 (samāśraya) して起こってきた (āsādita) 清らかな (avadāta) 智慧 (mati) は、あらゆる存在は生起 (prasava) した直後に滅すること (刹那滅) と結びついていると確定する。したがって、また [別な状態にある布は] それら (諸の糸) とは別であることが認められるから、すでに証明されたものが証明されること (siddhasādhyatā)<sup>(37)</sup> になってしまうピシャーチャ (悪霊、過失 skyon, doṣa) が、どうして汝を捉えないであろうか。[2'] 第二の選択支 (特殊な状態にある諸の糸とは布は別であると証明される場合) も、強い火 (anala) に熱せられた (upatapta) 石の表面に諸の足 (pāda) の表面が止まることをあらしめない (無理である)。立証因 (制作者が異なること等) は別のもの (糸) に関して成立しない (asiddhatva)<sup>(38)</sup> からである。なぜなら、特殊な状態 (sthāna) にあるから、布に1) 区別された制作者という性質があるということは、別のもの (糸) に関して、成立している根拠 (siddhapaddhati) とはならない [布の制作者と同じであることもあり得る]。なぜなら、そういったもの (特殊な状態にある糸) には、[布の制作者と] 別であることが全く存在しないから、[別であると] 認められないもの (布) が、どうして [糸と] 別な制作者という性質があると認められるであろうか。VNV p. 28,24-27, P 47b2-4, D73a5-6 tadanantarādhihitam api pramāṇena samabhilaṣitam anorathaparipūraṇāyālaṁ hetvasiddeḥ / yataḥ paṭa iti tantuṣv eva sanniveśaviśeṣeṇ-āvasthiteṣu pratyayo vartate / tadviviktarūpasatyāntam unmiṣṭitacakṣuṣāpy adarśanāt sphaṭikādaḥ dr̥ṣṭam iti cet etad uttaratra niṣetsyāmaḥ /

2) その直後に述べられ求められていることも、荷車 (anas) と車 (ratha) とを完成するためにプラマーナが何の役に立とうか。立証因 (共通性と特殊とに関する知の対象であるから) が成立しない (hetvasiddhi)<sup>(39)</sup> からである。なんとなれば、布 (全体) という知は付着 (sanniveśa) した特殊性 (viśeṣa) を具えた状態の諸の糸 (部分) に関する知である。それ (糸) を離

れた自性 (rūpa) をもつもの (布) は眼を開かれた眼によっても決して見られないからである。

[反論] [色をもたない] 水晶 (sphaṭika) において見られる<sup>(40)</sup>。

[答論] このことは後に (青蓮華と香りなどの区別を吟味するところで) 我々は否定しよう。

VNV p. 28, 28-33 P1, 47b4-7, D73a6-b1 yat tv idam 3) upāyāntarasādhyatvāt 4) bhinnadeśāvasthitaiḥ 5) kriyamāṇatvāt 6) bhinnaparimāṇatvāt 7) pūrvottarakālabhāvitvād 8) bhinnasaktimattvāc ceti / atra prathamāsādhanaḥbhihitavikalpadoṣas tivrāmarśaviraktalocana ivārātis tatsampadaṁ na saḥate / prathame siddhasādhyatvaṁ dvitiye hetvasiddhatā / kṣaṇikatvād viśiṣṭānām utpādo 'bhimato yataḥ // iti saṅgrahaślokaḥ /

他方、これ [布は糸とは] は 3) 別な方法 (手段) で完成される故に<sup>(41)</sup>。4) 別な場所にある故に。5) 作られている性質がある故に。6) 分量 (parimāṇa) の区別がある故に。7) 前 (pūrva) 後の時間に存在している性質がある故に<sup>(42)</sup>。8) 異なった能力を具えている故に。この場合、最初の証明するもの (sādhana) 3) 別な方法で完成される故に、糸と布とは別である) によって言い表された選択支の過失は強い (tīvra)<sup>(43)</sup> 接触 (āmarśa) によって赤くなった眼<sup>(44)</sup> の如く、敵 (arāti) は、それを成し遂げること (sampad) に耐え得ない。

[1'] 第一のもの (別な状態にある布は糸とは別であると証明すること) に関しては、すでに証明されたことが証明される (siddhasādhyatva) [という過失である]。[2'] 第二のもの (特殊な状態にある布と糸とは別であると証明すること) に関しては、因が不成 (hetvasiddhatā)<sup>(45)</sup> である。刹那滅<sup>(46)</sup> であるから、[糸と布とは別でなくとも布には] 諸の特殊なもの (viśiṣṭa) の生起が認められる<sup>(47)</sup>。以上は総括の偈である。

I . B'. [グナとグニンとの区別に関するシャーントラクシタによる答論]

VNV p. 29, 1-12 P 47b7-48a6, D73b1-6 yac cedam uktam vicāra viśayāpannam indīvaram ityādi (VNV p. 28, 4) tad api na saṅgacchate yasmād indīvarasya gandhādaya itindīvarasvabhāvā gandhādayo madhubhāvanāviśeṣādikāryanirvarttanasaṁarthā iti yāvat / aviśiṣṭakāryasādhanaṁtmanā sāmānyabhūtagandhādīśabdaiḥ prasiddhāviśiṣṭakāryasādhanaḥkhyena viśeṣeṇa ye viśiṣṭās ta evam ucyante / na punar atrānyat kiñcid ity arthāvarṇitalakṣaṇaṁ dravyam asti, tasya tādrśo 'nupalabdher ity uktaprāyam / tathā cānena prakāreṇa teṣāṁ tadvyavacchedakaṁ bhavatīti / teṣāṁ tadvyavacchedakaṁ ca na cātyantaṁ bhinnam iti ko 'nayo virodha iti / sandigdha vipakṣavyāvṛttiko hetuḥ pratibandhāsiddhaḥ / na hi drṣṭāntamātrāt siddhir asti sarvasiddhiprasaṅgāt / api ca śīlāputrakasya śarīram, rūpasya svabhāva ity atrāpi śīlāputrakarūpayoḥ śarīrasvabhāvavyavacchedakatvam astīti bhedas tayoḥ api tataḥ prasajate, na ca bhavati naiḥsvabhāvvyaprasaṅgāt / tasmād ayam etenānaikāntikaḥ sphuṭam eva bhavadbhir abhidhāniyaḥ /

この吟味 (vicāra) の対象となっている青蓮華 (indīvara) 云々<sup>(48)</sup> と述べられているものも、妥当するものではない。なぜなら青蓮華の (indīvarasya) 香りなどはというのは青蓮華の自性

をもった香りなどが甘み (madhu) を起こす (bhāvanā) 特殊性などの結果 (kārya) を完成させる効力を具えているという意味である。特殊化されていない結果 (aviśiṣṭakārya) を成立させることを本質とするものによって一般 (sāmānya) となった香りなどの諸の言葉によって、周知された特殊化されていない結果 (aviśiṣṭakārya) を成立させるといわれる特殊性 (viśeṣa) によって特殊化された諸のものが、そう（効力を具えていると）いわれる。また、ここに何らかの [グナとは] 別であって対象を描き出さない (avarṇita) 特徴をもったドラヴィヤ [グニン] は存在しない。そういったもの (tādṛśa) は知覚されない (anupalabdhi) から、と述べられたように。同様に、この方法によってそれら（香りなど）にはそれ（青蓮華）を排除するもの (vyavacchedaka) が存在する。それら（香りなど）にとって、それらを排除するもの（青蓮華）は、決して区別されるもの (bhinna) ではないから、この二（青蓮華と香り）に対立 (virodha) があろうか。（排除し合う性質があるからという）因は異品からの排除（別であること）が疑わしく必然関係 (pratibandha) が成立しないものである（同一のものにも排除し合う性質がある）。（チャイトラとアルジュナなどという）喩例のみから [グナとグニンとの区別の] 成立が存在するのではない。すべてのものが成立することになってしまうからである。また胸像 (śilāputraka) の（第六格に対する）身体 (śarīra) は、色の（第六格に対する）自性はというこの場合も<sup>(49)</sup>、胸像と色の両者には、[胸像にとって] 身体が、また [色にとって] 自性が排除し合う性質 (vyavacchedakatva) があるから、両者の（胸像と身体との、また色と自性との）区別も、それ（排除し合う性質）から起こってくる。しかし、[両者の区別は] 起こらない。[排除され区別されるなら、胸像にとっての身体、色にとっての] 自性が存在しないこと (naiḥsvabhavya) となってしまうから。したがって、これ（第六格を根拠とするグナとグニンとの区別）はこのこと故に不定 (anaikāntika)<sup>(50)</sup> が明瞭に汝らによって (bhavadbhiḥ) 述べられているに違いない [第六格が使用されていてもグナとグニンとの区別は起こらない]。VNV p. 29, 13-18 P 48a6-b1, D73b7-74a2 (1) kiñ ca idam ativikalair mithyādarśanasamrāgapiśācāviṣṭabuddhibhiḥ kim indivarasya gandhādayaḥ ity ete śabdāḥ puruṣābhiprāyavyāpāranirapekṣā eva vastutattvanibandhanāḥ pravarttante (2) kiṁ vā yathaiva taiḥ prayujyante tathaiva vastutattvam anapekṣya tam artham asatkāreṇa pratipādayantiti yady ādyaḥ tadā sadā dhvananaprasaṅgo 'tītādiṣv anyatra ca puruṣecchāvaśān niyojanam na bhavet / na ca pravacanāntarabhedeṣv artheṣu pravṛttiḥ prāpnoti / na ca kasyāścid vāco 'satyārthatā syāt /

また、これは (1) 誤った見解に執着することによりピシャーチャに取り付かれた (āviṣṭa) 諸の知を全くもたない人々によって青蓮華 (indivara) の香りなどとはいうこれらの諸の言葉は、全く人の意図 (abhiprāya) の働きに依存していない実在の真実を根拠 (nibandhana) を有するものとして起こっているのか、(2) あるいは、それら（ピシャーチャに取り付かれた諸の知を全くもたない人々）によって起こされるのと全く同様に実在の真実性に依存せず、その



対象を正しく設けなくて語られているのであるか。(1) もし第一の場合「青蓮華の香りなどというこれらの諸の言葉が人の意図の働きに依存していない実在の真実を根拠とするもの」であれば、その時、常に言葉 (dhvanana) があることになろう。また過去などに関しても人の意志によって結びつけられたものではないであろう。また、他の学説 (pravacana) の区別を有した対象に関して、惹き付けられることはない。また、何らかの言葉にも誤った対象性がないことになろう (全て語られたものは真実となろう)。

VNV p. 29, 19-28 P 48b1-5, D74a2-5 (2) athottaraḥ tadā

yeṣāṃ vastuvaśā vāco na vivakṣāparāśrayāḥ /

ṣaṣṭhivacanabhedādicodyaṃ tāt pratri yuktimat // (PVSv v. 65)

yad āhuḥ

yad yathā vācakatvena vaktṛbhir viniyamya /

anapekṣitabāhyārthaṃ tat tathā vācakaṃ vacaḥ // (PVSv v. 66)

tadā na puruṣecchābalapravṛttaśabdavaśād arthatattvaṃ vyavatiṣṭhata iti tadavasthaṃ sandigdha vipakṣavyatirekatvaṃ hetor iti / etenaitad api pratyuktam vipratipattiviṣ-  
ayāpannāc candanād anye rūparasagandhasparśā hetvādayaś ceti pratijānīmahe na  
vyapadiśyamānatvāt śīlātulāḍhaka prasevikāvad iti / tasmāt tadbhāvapratiṣṭhānāya na  
kiñcit pramāṇam astīti sthitam etat /

(2) もし、第二の「実在の真実性に依存せず、その対象を正しく設けていないで語られている」場合であれば、その時、

諸の実在に基づく言葉は話し手の意志と異なるものに依存するものではない。そういったもの (話し手の意志によらない実在) に対して第六格や (単数、複数という) 数 (vacana) という区別などが非難の対象となることは道理に合っている。(PVSv v. 65)  
例えば、外界の対象に依存せず、諸の話し手によって言葉を性質とするものとして確定されるものの如く、それと同様に、[第六格や数を根拠とする区別などは] 言葉が表示したものである。(PVSv v. 66)<sup>(51)</sup>

そのとき、人の願いによって起こされた声から対象の真実を確定する [ことは不合理である]<sup>(52)</sup>から、その状態では因 (第六格や数) が異品 (無区別なもの) から排除されること (無区別なものには必ず第六格や単数複数の区別が用いられることはない) が疑わしい (不定因)<sup>(53)</sup>というこのことによって、次のこと、すなわち

(宗) 色、味、香、触という原因など [のグナ] は異なった (vipratipatti) 対象となっている白檀 (candana)<sup>(54)</sup> [グニン] と別なものであると我々は知る。

(因) [色などは白檀の色などと第六格によって] 述べられる故に<sup>(55)</sup>。

(喩) 石 (śīlā, rdo) [の重さ]、秤 (tulā, sraṇ) [の上下]、計量 (āḍhaka, bre) [の多少]、袋<sup>(56)</sup> [の大小] のように<sup>(57)</sup>、

というこのことも退けられる（第六格で表されているからといって白檀とその香りなどとの区別は存在しない）。したがって、それら（グナとグニンとが区別された）存在（bhāva）であることを明らかにするためのいかなるプラマーナも存在しないということが確定される。

[I .A', I .B' の統括]

VNV p. 29, 29-34 P 48b5-49a1, D74a5-b1 asmākaṁ tu tadabhāvapramāṇasādhakaṁ pramāṇam etat ye parasparavyāvarttamānasvabhāvāvasthitisamālīṅgitaśarīraḥ te vyatiriktvāyavidravayānugatamūrtim ātmātiśayaṁ nātmasāt kurvanti / yathā bahavo bhasmādhāranalālāthūkādayaḥ / tathā ca yathopadiṣṭadharmavantas tattvādaya iti svabhāva-hetuḥ / vaidharmyeṇa nabhaḥpaṅkajādayaḥ teṣāṁ niḥsvabhāvatvāt / parasparavyāvarttamānānām api yady ekasvabhāvān abhyupagame tasya teṣu sarvātmanā 'nyathā vā vṛtṭiyogo bādhakaṁ pramāṇam /

他方、我々にとって、その（部分とは別な全体というドラヴィヤの）無（abhāva）を証明するプラマーナ<sup>(58)</sup>（全体の無を確定すること）が以下のものである。

相互に排除し合う自性（parasparavyāvarttamānasvabhāva）をもって存在しているもの（部分と全体）と必然関係にある諸のもの（samālīṅgitaśarīra）は、[それら諸部分とは]異なったそれ自体の卓越性（ātmātiśaya）を有した[単一な]全体というドラヴィヤ（avayavidravaya）と一致した具象的なものを自体とするのではない。例えば、[排除し合うことのない同質の]多くの灰（bhasman）を保っている（ādhāra, 'chaṇ ba）種々の<sup>(59)</sup>容器<sup>(60)</sup>などのように。（論理的必然性）

同様に実際のもの（tattva）などは述べられたままの[相互に異なった多なる]ダルマ（諸部分）を具えている故に。（論理的根拠）

[実際のものなどは、（単一な）全体というドラヴィヤを自体とするものではない。（結論）]というのは自性因（svabhāva-hetu）が[根拠となっているに推論である]。[全体というドラヴィヤは諸部分とは別に存在しない]異類法（vaidharmya）として虚空（nabhas）の泥沼（paṅka）から生じた（非実在な）ものなどがある。それらは無自性であるから。諸の相互に排除し合うもの（諸部分）にも、もし諸の一なる自性（ekasvabhāva）のもの（全体）を認める場合<sup>(61)</sup>、それら（諸部分）にそれ（全体）は、全体的に（sarvātmanā）あるいはそうでない場合に（一部分として）<sup>(62)</sup>存在関係をもつこと（vṛtti）は不合理である[相互に異なった自性を有する諸部分は、それと別な単一な全体と、全体としても一部分としても存在関係をもたない]ということが拒斥の検証（bādhakaṁ pramāṇam）<sup>(63)</sup>である[したがって不定因ではない]。

VNV p. 30, 3-13 P 49a1-8, D74b1-6 kutas tad dhi yugapad anekatra sarvātmanā varttamānam anekādhārasthitādheyavad anekatvam ātmano 'numāpayatīti katham asyābhinnavabhāvatā yojyate / ekāvayavopalambhavelāyāṁ ca sakalasya tatra parisamāptatvādupalabdhiprasaṅgaḥ / anekāvayavopalabdhidvāreṇopalambhakatipayāvayavadarśane 'pi

syāt samastāvayavopalambhadvāreṇa upalabdḥau sarvakālam adarśanaprasaṅgaḥ tasyām  
bhāsvaramadhyabhāgānām sakṛd anupalambhāt / ekāvayavakampe ca sarvakampādi-  
prasaṅgaś ca vācyaḥ / nāpy ekadeśena sāvaya(va)tvaprasaṅgāt / ekadeśānām cānavast-  
hāprasaṅgāt / te 'pi hi tasyāvayavā iti pāṇyavayavavṛtṭeṣv api anyena varṭtitavyam  
ityādinā tadanyaikadeśābhāvavān ekaḥ kaścīd avayavī vidyate / tathā cāṇvādisamudāya  
evāstu ko 'nurodhaḥ svātmabhūteṣv avayaveṣv iti / na vā kvacid apy asau vṛttaḥ na hy  
ekadeśāḥ pratyekam avayavīty alāṁ pratiṣṭhitamithyāpralāpair iti viramyate /

〔反論〕 何故であるか。

〔答論〕 なぜなら、それ（全体というドラヴィヤ）は多に基づいて確定された依存されるべき  
もの（諸部分）のように多において全体的に（sarvātmanā）存在している多なるものを自ら推  
定せしめるから、どうして、それ（全体）に区別されない（単一な）自性が結びつけられようか<sup>(64)</sup>。  
また〔全体に〕<sup>(65)</sup>一なる部分（ekāvayava）が認識されるとき<sup>(66)</sup>、全て（sakala）がそれ（一部  
分）に収められる性質（parisamāptatva）<sup>(67)</sup>があるから、〔一部分において全体が〕認識される  
ことになってしまう。多なる部分において〔全体が〕<sup>(68)</sup>認識されることによって認識し、いく  
つかの（katipaya）部分を見るとときにも〔全体に部分が〕存在しよう。すべての（samasta）部  
分の認識によって〔全体が〕認識される場合<sup>(69)</sup>、あらゆるときに、〔全体は〕見られないことにな  
ってしまいます。それ（すべての部分）において、こちら側と真ん中（madhya）の諸の部分（bhāga）  
は<sup>(70)</sup>、一度に認識されないからである。また、〔一部分に全体があるなら〕一部分が揺れ  
（kampa）れば、すべてが揺れるなどになってしまうことがいわれなくてはならない<sup>(71)</sup>。一  
部分よって〔全体を認識するの〕でもない。〔全体が〕部分を具えることになってしまうから  
である。また諸の一部分が無限遡及（anavasthā）となってしまうからである<sup>(72)</sup>。なぜなら、  
それ（全体、身体）には、それらの諸部分があるから、手（pāṇi）<sup>(73)</sup>なる部分との存在関係  
（vṛtti）に関しても、他（の足などの部分）によって存在しなくてはならない云々によって、  
それ（全体）と別な一部分をもたないいかなる単一な全体が存在しようか。また同様に、原子  
（aṇu）などの集合体（samudāya）こそが、〔認識対象として〕存在しよう。それ（原子など  
の集合体）自身となっている部分において、あるいは、これ（全体）は、どこにおいても存在  
しない。なぜなら、〔原子などの集合体の〕諸の一部分が個々に全体（avayavin）なのではな  
いから、打ち立てられた誤ったたわごと（pralāpa）（原子は超感覚的であるから、認識が成  
立するためには全体が要請されるということ）が、どうして必要であろうか。

VNV p. 30, 14-21 P 49a8-b5 D74b6-75a3 tad evam etat paramatamalam ālocyamānativ-  
ratarārkaśmisampātayogihimaśailaśilāśakalavad vilayam upayātīti manyamānaḥ prāha  
kim arthāntarakalpanayeti (VN p. 6, 20) / <2> syād iyattarāśā parasya naivānekasyaikār-  
thakriyākāritvam astīty ata āha bahavo 'pi hītyādi / kimvat caḥsurādivat (VN p. 6, 21) /  
yathā rūpālokamanaskāracakṣurādayaś caḥsurādivijñānam ekaṁ kurvanti tathā rūpā-

dayo 'py udakadhāraṇaviśeṣādikām ekām arthakriyām kariṣyanti arthaḥ / yataś caitad  
evam tasmāt tasyaikārthakriyāsāmarthyasya khyāpanāya tatra rūpādāv ekasya paṭādiś-  
abdasya niyogo 'pi syād iti etad yuktaṁ paśyāmaḥ (VN p. 6,22-23) / na kevalam ekārtha-  
kriyākāritvaṁ teṣām ity apyśabdenāha /

以上の通りこの他者の欠陥のある見解（mata, gshuñ lugs）は、より厳しい（tivratara）考察  
が施されている太陽（arka, ñi ma）の光（raśmi, 'od）の衝撃（saṃpāta）にさらされたヒマ  
ラヤ（himaśaila）の石（śilā）の小片（śakala）のように、破壊（vilaya）に陥ると考えてい  
る人（ダルマキールティ）が別の対象（arthāntara）を構想（kalpanā）して何になろうか  
（VN p. 6,20）、と答えた。

## II. [認識因果論、言語論（多→一）による別の対象（全体）不要論]

〈2〉[反論] さらなる望みがあっても、他者にとって多なるものが一なる結果を設けること  
（arthakriyākāritva）は決してない。

[答論] それ故に、なぜなら多なるものも [一なる結果を設けるものである] 云々（VN p.  
6,21）と答える。

[反論] どういうものであるのか。

[答論] 眼などのように（VN p. 6,21）。例えば、色、光、意識作用、眼<sup>(74)</sup>など（の多）が単  
一な眼識を設ける<sup>(75)</sup>。それと同様に、色など [の多] も、水を保持するという特殊性などの  
一なる結果を設けるであろうという意味である。そういうわけで、それはそういうことである。  
したがって、その単一な効果的作用（結果を設けること）の能力を示すために、その色など  
（多）に関して一個の布（paṭa）などの言葉が結びつくこと（niyoga）も（api）あろうから、  
これは道理にかなっていると我々を見る（VN p. 6,22-23）。それら（多なる色）が、単に一  
なる結果を設けるだけではないということが、も（api）という言葉によって答えたのである。  
VNV p. 30,22-31 P1,49b5-50a2, D75a3-7 katham yuktaṁ iti cet evaṁ manyate kenacit  
prajojanena kecic chabdāḥ kvacin niveśyante, tatra yad anekam ekatropayujyate tad  
avaśyaṁ tatra codanīyam / tasya ca pṛthk katham codane 'tigauravaṁ syāt / na  
cāsyānanyasādhāraṇaṁ rūpaṁ śakyaṁ codayitum / nāpy asyāyāsasya kiñcit sāphalyam,  
kevalam anena yogyāś tatra ye 'rthāś codanīyāś ta ekena vā śabdena codyeran bahubhir  
veti svātantryam atra vaktuḥ / tad iyaṁ ekā śrutir bahuṣu vaktrabhiprāyavaśāt pravart-  
tamānā nopālabham arhati / na ceyam aśakyapravarttamānā icchādhinatvāt / yadi hi  
na prayoktur icchā, katham iyaṁ ekatrāpi varteta / icchāyāṁ vā ka enām (katham)  
bahuṣv api pratiba(n)ddhuṁ samarthaḥ / prajojanābhāvād apravarttanam ity api nāśaṅ-  
kaniyam bhinneśv apy ekasmāc chabdāt pratītir(s ?) tatprajojanabhedenā yathā syād ity  
uktatvāt prajojanasya / tasmāt sūktam asmābhiḥ yuktaṁ paśyāma (VN p. 6,22-23) iti /  
[反論] どうして、道理に適っているのか。

[答論] 以下の通りに考えられる。何故に、諸の何らかの言葉が、ある場所で用いられるのか。その場合、多 (aneka) が一なるものにおいて (ekatra) 用いられることは、その場合、必ず要請されなくてはならない。また、それ (多) が別々に要請され (求められる) 場合、何らかの形で非常な冗長さ (atigaurava) となろう。また、これ (一つ一つ述べること) は他と共通した自性を述べ得ない。また、この [一つ一つ述べることの] 煩わしき (āyāsa) には何の有益さ (sā-phalya) もない。そこにおいて要請されなくてはならない有用な (yogya) 諸の対象は、単にこのこと (煩わしき) よって、あるいは一個の言葉によって要請されよう。あるいは、その場合、話し手 (vakṭṛ) の自らの意志で多 [を表す言葉] によって [要請されよう]。したがって、多に関して、話し手 (vakṭṛ) の意図 (abhiprāya) から起こっているこの一と述べること (śruti) は非難 (upā lambha) に値しない。またこれ (多に関して一と述べること) は起こっている可能性がないではない。願望 (icchā) に依存しているからである。なぜなら、もし話し手 (prayokṭṛ) の願望がないなら、どうしてこれ (多) が一なるものにおいてもあろうか。あるいは、願望がある場合、これ (一) が多に結びつく効力があるのか。目的 (prayojana) が存在しないから、起こらないということも懸念してはならない (nāśaṅkaniyam)。諸の区別あるものに関しても一個の言葉から知 (pratiti) が [起ころう]<sup>(76)</sup>。その目的を区別することによって [起こってくる]。例えば、[一なる言葉が結びつくことも] あろうという (VN p. 6,22) 目的が述べられているから、それ故、我々によって素晴らしく述べられたことは、道理に適っている (VN p. 6,22-23) と [ダルマキールティによっていわれるのである]。

## 結 論

1. 可視的な認識対象とは <1> 無区別 (単一) であるのか、<2> 有区別 (多) であるのかという選択支を設けヴァーッヤヤーナとウッドゥヨータカラとは、それぞれ NBh., NV で問いを發し、<1> なら全体 (avayavin) が成立するし <2> なら多に関して一なる知は矛盾すると指摘する。さらにウッドゥヨータカラが部分 (多) とは別の対象として全体 (一) を実在とし両者は和合関係 (samavāya) において結合すると立論するに対し、ダルマキールティは VN で <1>、<2> に対応して I . 別の対象すなわち全体を想定する必要はなく、II . 眼、対象、光、注意力などの多から一なる眼識が生起する如く一なる結果の生起すること (ekārthakriyākārin) 及び多様なものに関し一なる言葉 (ekasābda) が存在すると応じる。この点、認識因果論と言語論とに一貫した理論が見出される。この I ., II . により全体不要論を表わしている。
2. 以上のことはシャーンタラクシタの VNV により跡付けられるが、さらにシャーンタラクシタは上のダルマキールティの理論を解釈するに止まらず、ウッドゥヨータカラによる 1.2. d. 特殊な状態にあることを根拠とする別の対象 (全体) の立論を破している。また第六格 (属格) の使用によりグナとグニンとは区別されるとのウッドゥヨータカラの主張を俎上に載せ、

それは話者の意図に基づく故、両者の区別の根拠を表すものではないというダルマキールティの『量評釈自注』(PVSV) vv. 65,66により応じる。1.,2.ともシャーンタラクシタは『真実綱要』(TS)や『中観莊嚴論』に先だって、ニヤーヤヴァイシェーシカ学派の哲学をダルマキールティの因果論、言語論に基づき論破する方法を VNV で確立している。またシャーンタラクシタは諸部分と全体とは総体としても一部分としても結びつくことはないということを反所証拒斥検証として全体 (avayavin) を退けている。

〔略号〕

- AKBh: Vasubandhu, *Abhidarmakośabhāṣya*, ed. by Pradhan (1967)  
AKv: Yaśomitra, *Sphuṭārthā Abhidarmakośavyākhyā*, ed. by Wogihara (1936)  
Māl: Kamalaśīla, *Mādhyamakāloka*, P.No. 5287, D.No. 3887  
NB: Dharmakīrti, *Nyāyabinduḥ*  
NBh, NV: *Nyāyadarśanam* with Vātsyāyana's *Bhāṣya*, Uddyotakara's *Vārttika*, Vācaspati Miśra's *Tātparyatīkā* and Viśvanātha's *Vṛtti* Vol. I, II. Rinsen Book Co. 1982.  
PVP: Devendrabuddhi, *Pramāṇavārttikavṛtti*, P.No. 5717, D.No. 4217  
PVP(S): Śākyabuddhi, *Pramāṇavārttikatīkā*, P.No. 5718, D.No. 4220  
TS: Śāntarakṣita, *Tattvasaṃgraha*, Kamalaśīla, TS-*pañjikā* ed. by S.D. Shastri, G.O.S.  
VN: Dharmakīrti, *Vādanīyāyaḥ*, ed. by M.T. Much. Teil Sanskrit-Text. Wien 1991 P.No. 5715, D.No. 4218  
VNV: Śāntarakṣita, *Vādanīyāvṛttivipañcitārtha*, ed by S.D. Shastri. Varanasi. 1972. P.No. 5275 D.No. 4239

〔参照論文〕

岡崎康浩 (2005) ウッドウョータカラの論理学—仏教論理学との相克とその到達点—、平楽寺書店／Gaṅgānātha Jhā (1983) *The Nyāyasūtras of Gautama with Vātsyāyana's Bhāṣya and Uddyotakara's Vārttika*, Vol. I-IV. reprinted Kyoto.／戸崎宏正 (1979) 『仏教認識論の研究上巻』、(1985) 『同、下巻』／菱田邦男 (1993) 『インド自然哲学の研究』／船山 徹 (1990) 部分と全体—インド仏教知識論における概要と後期の問題点—、東方学報第62冊／森山清徹 (2011) シャーンタラクシタの *Vādanīyāvṛttivipañcitārtha* とカマラシーラの無自性論証—ダルマキールティの『量評釈自注』(PVSV) を巡って—、佛教大学『仏教学部論集』第95号／(2013) シャーンタラクシタ、カマラシーラの無自性論証とダルマキールティの刹那滅論証—*Vādanīyāya* における反所証拒斥検証とその活用—、印度学仏教学研究 No. 61-2／(2013) ダルマキールティの *Vādanīyāya* におけるヴァイシェーシカ批判と後期中観派—全体性 (avayavin) の無の確定—

〔注〕

- (1) Cf TSP p. 252, 5-7 *ad* TS 611 uddyotakaras tv āha āśrayāśritadharmanirdeśamātram etat, avayavyavayaveṣu pravarttata iti āśritabhāvalakṣaṇā hi samavāyarūpā prāptir cf TSP p. 255, 9-13 *ad* TS 619-620 総体 (kṛtsna) として、あるいは一部分 (ekadeśa) という二つの観点から全体批判を展開することは世親 AK p. 189, 16-24に始まりヤショミトラ、ダルマキールティ、シャーンタラクシタ、カマラシーラへと継承される。その世親に対し、ヴァーツヤヤーナ (NBh. p. 1049, 3-6 *ad* NS 4-2-11) が、ヤショミトラに対してウッドウョータカラ (NV pp. 472, 5-474, 3 *ad* NS2-1-32., p. 1049, 11-17 *ad* NS 4-2-11) はその二点からの詰問自体不合理であると応答している。世親に始まるとする根拠は、本稿(12)、(25)参照。この点は別稿で論じる。なお船山 (1990)、p. 612, 16) ではヴァーツヤヤーナと世親とに上の二つの観点からの存在関係に関する同じ論法が見出



されることを指摘している。しかし、どちらが先行し、それに答えているかの両論師の前後関係については言及されていない。(2) PVIII223 ko vā vorodho bahavaḥ saṃjātātīśayāḥ sakṛd / bhaveyuh kārāṇaṃ budder yadi nāmendriyādivat // 223 // あるいは、もし卓越性 (atiśaya) の生じた多数 (の原子) がまさしく感官など (対象、注意力、光 PVP D197a4-5) のように、一度に知の因となるなら、いかなる矛盾があろうか。(3) Cf 戸崎 (1979) p. 319 fn.(79) PVP 230a5-6 (4) PVTŚ D209a2 gsaḥ byed pa, Uddyotakara, cf NV p. 497, 10-17 ad NS 2-1-34, NV p. 502, 5-8, p. 503, 11-12, p. 504, 8-12 ad NS 2-1-36 (5) そう主張する者とは元は世親と考えられる。Cf AK p. 189, 24 paramāṇvatīndriyatve 'pi samastānāṃ pratyakṣatvam AKv p. 342, 24-25. この世親へのヴァーッヤーヤナによる反論 <1>、<2> に対してヤショミトラ、ダルマキールティは答論していると考えられる cf 注(25) (24). この <1>、<2> の観点を活かしウッドウョータカラは諸原子が特殊性を有するなら全体 (別な対象) が成立し、特殊性を起こさないなら超感覚的な諸原子が感覚的に知られることになり矛盾すると論難している。cf NV p. 502, 5-8., p. 503, 11-12., p. 504, 8-12., ad NS 2-1-36. これはヤショミトラ批判と考えられる cf 注(25). (6) Cf 本稿(3).和訳研究1.A. VNV pp. 27, 25-28, 6 <1> <2> (7) Cf VNV p. 27, 25-28, 6 本稿(3).和訳研究1.A.7 (8) Cf VNV pp. 27, 25-28, 6 本稿(3).和訳研究1.A.8 (9) 本稿注(30) (10) Cf G. Jhā p. 493, 岡崎 (2005) pp. 403-404に訳出される。(11) この反論者とはヤショミトラではないか。なぜなら、布が部分を有することを根拠に糸と布とは別のものではないと論じているからである。AKv p. 341, 8-12 ata aha. samūhamātraṃ ca paṭaḥ syād iti vartate. ekasmin tantav eko bhāgo aparasmīn apara iti tantuvartināṃ bahūnāṃ bhāgānāṃ samudāyaḥ paṭa iti ca prāpnoti. na ceṣyate. kaś ca tantubhyo 'nyaḥ paṭabhāga iti Kaṇabhugbhaktāḥ praṣṭavyaḥ yena bhāgenāyam indriyasaṃnikṛṣṭe tantau varteta. tasmād etāṃ api kalpanāṃ kalpayitvā nāto 'nyaḥ paṭaḥ sidhyati. [答論] 布は集合 (samūha) に他ならないということである。一なる糸に [布の] 一なる部分があり、他なる [糸に布の] 他 [なる部分] が存在するから、諸の糸に存在する多くの部分の集合 (samudāya) が布であるということにもなる。しかし [このことは汝によって] 認められない。また [糸と布とが別であるなら] 諸の糸と別な (anya) いかなる布の部分があるのか、とカナダを崇拜する者は詰問されなくてはならない。これ <布> は部分にとして (bhāgena) 感官に結びついている糸において存在しよう。したがって、この考えを整備して (kalpayitvā)、布はこれ (糸) とは別のもの (anya) ではないと証明される。(12) Cf. TSP ad TS 570 paṭasya rūpādayaḥ 本稿注(31) (13) ヤショミトラの推論を批判していると考えられる。AKv. p. 341, 8-12 本稿注(10) (14) 以下の <1>、<2> に対してシャントラクシタはVNV 訳中、I. A'. [1'] [2'] で別な、あるいは特殊な状態にあることが糸と布とが別であることにならないと答論していると考えられる。Cf. TSP ad TS 578-579 布という言葉、本稿注(11) (15) この I., II. は本稿1.2.a. NBh., NV <1>、<2> に対応している。別の対象とは全体を意味する。Cf., 1.2.a.-d., PV (202) 戸崎 (1979) p. 303. (16) ダルマキールティの I. II. に先行して本稿1.2.a. NBh., NV <1>、<2> に対してヤショミトラは答論していると考えられる。AKv p. 342, 19-24 paramāṇvatīndriyatve 'pīti vistaraḥ. yathā bhavatāṃ Vaiśeṣikāṇāṃ atīndriyatve 'pi samastānāṃ kāryāraṇabhakatvaṃ na vyastānāṃ. evaṃ asmākaṃ api samastānāṃ eva pratyakṣatvaṃ na vyastānāṃ asaty apy avayavini arthāntarabhūte. yathā cakṣurādīnāṃ cakṣurūpālokamanaskārāṇāṃ samastānāṃ cakṣurvijñānotpattau kārāṇatvaṃ naikakasya. 原子が超感覚的であっても、と詳しく説かれる。例えば、汝ら勝論派にとって [原子は] 超感覚的であっても、結合した (samasta) のものには結果を設けることがある。分離しているもの (vyasta) には [結果を設けることは] ない。そのように、我々 (仏教徒) にとっても、I. 全体 (avayavin) という別の対象となったものは存在しなくとも、結合したものにだけ直接知覚されることがある。分離しているものには [直接知覚されること] ない。II. 例えば、眼などにとつてすなわち眼、色、光、注意力が結合した場合、眼識を生起する際の原因となる。一つ一つのものには [眼識を生起する際の原因とはなら] ない。(17) 以下の <1> <2> が本稿1.2.a NBh., NV. <1> <2> と一致している故、部分とは別の対象 (arthāntara) としての全体を主張しているのはヴァー

ッヤーヤナ、ウッドウョータカラであるといえよう。cf 注(24) (18) P46b1 D72a6 bstan du yod pa, 一なる実体 (dravya) という一なる知 (19) Cf TS560 (20) P46b3, D72a7, snam bu dañ (21) samasta であるが P46b1, D72b1 spyi (sāmānya) により読む (22) vyasta であるが P46b1, D72b1 bye brag (viśeṣa) により読む (23) P47b4, D72b1 śes pa 'i yul yin pa 'i phyir により pratyayaviṣ-ayatvāt と読む (24) P46b4, D 72b1 snal ma dañ snal ma 'i tshogs pa la snam bu 'i śea pa mi skye ba 'i phyir ro // により読む (25) P46b5 bsgrub pa 'i phyir, D72b1 ma bsgrubs pa 'i phyir (26) cf TS 560 (27) 以下に示す TS 560 及びその TSP からは、VNV のものと論理的根拠として上げられるものは、共通した観点のものであり、それをシャーンタラクシタは、TS に先立って VNV で表していることになる。vibhinnakartṛśaktiāder bhinnau tantupaṭau tathā / viruddhadharmayogena stanbhakumbhādibhedavat // 560 // evaṃ guṇaguṇinor bhedaṃ prasādhya, avayavāvayavinor bhedaprasāadhanāyāha vibhinnetyādi / prayogaḥ ye bhinnakartṛkāryakālaparimāṇās te vibhinnāḥ, yathā stambhakumbhādayaḥ / vibhinnakartṛkāryakālaparimāṇās ca vicāraṇiṣāyāḥ / nāsiddho hetuḥ, nāpy anaikāntikaḥ / viruddhadharmādhyāsamātranibandhano hi bhāvānaṃ parasparato bhedaḥ, yathā stambhādīnām / sa cāvayavāvayavinor apy asti / tathā hi tantūnām yoṣit kartrī, paṭasya kuvindaḥ śītāpanodādikāryasamarthaḥ paṭaḥ, na tantavaḥ / prāg api tantūnām upalabdheḥ pūrvakālabhāvitvam, paṭasya tu paścāt kuvindādivyāpārōttarakālabhāvitvam / paṭasyāyāmaṇvistarābhyāṃ yāvat pramāṇaṃ na tāvat pratyekaṃ tantūnām astīti bhinnaparimāṇatvam, ato nānaikāntikatā hetūnām iti bhāvaḥ // 560 // 同様に糸と布との両者は区別されるもの (bhinna) である。作者 (kartṛ) と能力 (śakti) などが相違する (vibhinna) からである。対立した性質 (viruddhadharma) をもつ故に、柱と壺などが区別されるように。(TS 560) 以上の通り、グナとグニンとの区別を証明して、部分と全体との区別を証明 (prasādhana) するために、vibhinna 云々と言った。推論式は、

作者、働き (kārya)、時間、分量 (parimāṇa) の区別されるものは別なものである。例えば、柱 (stambha)、壺 (kumbha) などのように。(論理的必然性)

考察の対象 (vicāraṇiṣaya) であるもの (糸と布と) は、作者、結果 (kārya)、時間、分量 (parimāṇa) の区別されるものである。(論理的根拠)

[糸の布とは別なものである。(結論)]

[以上の推論の] 因は、不成でもなく、不定でもない。なぜなら、諸存在の相互の区別は、対立したダルマが置かれていること (adhyāsa) だけを根拠 (nibandhana) にもつものである。例えば、柱などにとってのように。また、それ (対立したダルマが置かれていること) は、部分と全体性にとっても存在する。というのは、諸の糸の作者は糸姫 (yoṣit) であり、布の [作者は] 織匠 (kuvinda) である。布は冷たさを退ける (apanoda) などの働きをする能力 (samartha) を有するが、諸の糸は [その能力をもた] ない。諸の糸は先に認識されるから、前の時間 (pūrvakāla) に存在する性質 (bhāvitva) がある。一方、布は後に存在し織匠などの働きの後に (uttarakāla) 存在する性質がある。布の長さ (āyāma) と拡がり (vistara) から分量にいたるまでのものは、諸の糸のそれぞれには存在しないから、[両者は] 分量的に区別される。これ故に、諸の因は不定ではない (作者から分量にいたるまでのものが区別されるものは、必ず別なものであるということに疑いはない) という意味である。// TSP 560 // (28) 織匠 P46b5 D72b2 gtag bzañs (kuvinda) cf NV 本稿1.2.a.注(7) (29) cf NV 本稿1.2.a.注(8), TS 560 この(28)(29)は、(7)(8)に示したウッドウョータカラの推論式による表明と一致している故、それらはウッドウョータカラによる反論と考えられる。(30) P46b7, D72b4 srid sgrub, arjuna (31) cf TS 558 [部分 (avayava、糸 tantu) と全体性 (avayavin、布 paṭa) とは別であることを推理により論じる] rūpādindīvarādibhya ekāntena vibhidyaṭe / tena tasya vyavacchedāc caitrād iva turaṅgamaḥ // TS 558 // tadevaṃ tavat pratyakṣata eva guṇaguṇinor bhedaḥ siddha iti pratipāditam / idānim anumānato 'pi siddha iti pratipādayann āha rūpādytyādi / indīvarādibhyo guṇo bhinnāḥ indīvarasya rūpādayaḥ ity evaṃ tenendrīvarādīnā tasya rūpāder vyavacchedāt / yathā caitrasya turaṅgamaḥ iti caitreṇa

svāmyantarebhyo vyavacchidyamānas turaṅgamas tato bhidyate // TSP 558 // 色などは、蓮華 (indivara) などから完全に区別される。それ (色など) は、それ (蓮華) によって区別されるからである。[例えば、チャイトラの馬という場合] チャイトラから馬が [区別される] ように。

(TS 558) 以上の通り、まず直接知覚の点からこそ、グナとグニンとの区別が証明されると [対論者によって] 述べられた。今度は推理という点からも証明されると述べている者が、色など云々といっている。蓮華などからグナは区別される。蓮華の色など (indivarasya rūpādayaḥ) というのは、そのようにその蓮華などによって [他の蓮華から区別される] その (蓮華の) 色などは [蓮華から] 区別 (vyavaccheda) されるから。例えば、チャイトラの馬とはというのはチャイトラによって別の主人 (svāmin) 達から区別されている (vyavacchidyamāna) [そのチャイトラの] 馬はそれ (チャイトラ) から区別される。(TSP 558) (32) 以上の対論者による推論の因が不成であることを示す cf TSP ad TS 580-582 (33) P47a4, D72b7, gnod phyir (34) D72b8 rmoṇs pa 'i 'dod pa ṇid sñon du soṇ (P47a3 bñon) bas byas pa yin no (35) P47a5 D72b8 phra mo, sūkṣmam (36) cf 本稿 1.2.d. NV では saṁsthānaviśeṣāvasthita なおそこでのウッドウヨータカラによる [1]、[2] に対する答論が以下の [1']、[2'] であると考えられる。cf PVIII 152 戸崎 (1979) p. 245 fn.(100) (37) cf TSP p. 282,7 ad TS 578-579 siddham sādhyate prathamebhyaś ca tantubhyaḥ paṭasya yadi sādhyate / bhedaḥ sādhanavaiphalyaṁ durnivāraṁ tadā bhavet // TS 578 // prāptāvasthāviśeṣā hi ye jātās tantavo 'pare / viśiṣṭārthakriyāśaktāḥ prathamebhyo 'vilakṣaṇāḥ // TS 579 // もし、最初にある諸の糸と布との区別が証明されるなら、その時、[すべてのものは刹那滅であるから前後の相違のあるのはわかりきったことであり] 無益な証明となることは避けがたいであろう。(578) なぜなら、最初のもの (諸の糸) と別な特殊な状態を得て (prāptāvasthāviśeṣa) 起こっている [後の] 諸の糸 (すなわち布) が 区別された効果的作用の能力 をもつものであるが、[前後の糸は] 異なった特徴をもつもの (別物) ではない。(579) vibinnakartṛśaktyādeḥ ityādāv āha prathamebhyaś cetyādi / yadi prathamāvasthābhāvibhyo 'samadhigatapaṭākhyānebhyaś tantubhyaḥ paṭasya bhedaḥ sādhyate, tadā siddham sādhyate, sarvabhāvānām kṣaṇikatvena pūrvakebhyaś tantubhyaḥ paṭaśabdavācyānām tantūnām tadvilakṣaṇapadārthāśambhave 'py utpādasyāṅgikaraṇāt // 578-579 // 区別された作者や能力などを有しているから [糸と布とは別である] 云々に対して、最初にある [諸の糸と] 云々と答える。もし、布という名称 (ākhyāna) を得ていない (asamadhigata) 最初の状態にある諸の糸と布との区別が証明されるなら、そのとき、すでに成立していることが証明される。あらゆる存在は刹那滅 (kṣaṇikatva) 故に、先の諸の糸から布という言葉でいわれる諸の糸には、それと異なった特徴をもった言葉の対象 (vilakṣaṇapadārtha) があるのではなくとも、生起することが認められる (āṅgikaraṇa) からである。(38) cf TS 582 [不成因であることの指摘] tebhyaḥ samānakālas tu paṭo naiva prasiddhyati / vibhinnakartṛsāmarthyaparimāṇādīdharmavān // 582 // 一方、布がそれら (諸の糸) と 同時にあるもの (samānakāla) であり、相違した作者、効力、分量などのダルマをもつものであることは、全く成り立たない。(582) [したがって、諸の糸と布とは作者、能力、分量が異なるのではないから、因は不成である cf TSP ad TS580-582 hetūnām asiddhatā] (39) cf TS 580-582 (40) P47b4 śes pa la sogs pa la mthoṇ shes na (41) P47b4, D73a6 bsgrub par bya ba ma yin pa 'i phyir 証明されないから (42) cf PVIII 151 戸崎 (1979) p. 244, TSP ad 560 (43) P47b5 rnon po, tikṣṇa 鋭い (44) virakta ではなく rakta locana と読む P47b4, D73a7 mig dmar (locana) (dgra bo 敵) (45) cf TSP ad TS 580-582 hetūnām asiddhatā (46) cf TSP ad TS 578-579 (47) cf TSP ad TS 583 anyonyābhisarāś caivam ye jātāḥ paramāṇavaḥ / naivātīndriyatā teṣām akṣāṇām gocaratvataḥ // 相互に寄り添って (abhisara) 生起している諸原子は、決して超感覚的なものではない [原子は常住と認める者たちにとっては、原子に 特殊性 (viśeṣa) がないから、超感覚的であろうが、それを無常と見る者には特殊性があり、認識され得る]。それら (諸原子) は、諸の感官 (akṣa) の対象となるからである。(48) VNV pp. 27, 25-28, 6. I.B. cf TS 558 (49) 本稿 1.2.b. AKv. p. 180, 24-30., NV p. 370, 3-5 ad NS 1-2-4. VNV p. 29, 19-28 白檀 (candana) (50) TS 571

tathā hi bhinnam naivānyaiḥ ṣaṇṇām astitvam iṣyate / teṣāṃ vargaś ca naivaikaḥ kaścīd artho 'bhyupeyate // というのは〈不定であることを確定する (anaikāntikatvam eva samarthayate TSP ad TS 571)〉他学派（ヴァイシェーシカ）によってさえ、六句義にとって区別された存在性 (padārthanam astitvam TSP ad TS 571) は認められていない（六句義は存在性そのものである）。またそれら（六句義）には集合 (teṣāṃ ṣaṇṇām vargaḥ) という何らかの単一なものは、全く認められない。(51) cf. PVSV 65 yeṣāṃ vastuvaśā vāco na vivakṣāparāśrayāḥ / ṣaṣṭhīvacanabhedādicodyam tām prati yuktimat // PVSV 66 yad yathā vācakatvena vaktṛbhir viniyamate / anapekṣitabāhyartham tat tathā vacakam vacaḥ // 実在に基づく諸の言葉は話し手の意志とは別のもの (apara) に依存することはない。それらの（話し手の意志による）ものに対して第六格 (ṣaṣṭhī 属格) や [単数と複数との] 数 (vacana, 文法上の数) の区別などに疑念をもつことは理屈に適ったことである (65)。例えば、外界の対象に依存しないで諸の話し手によって言葉の性質として確定されるように。それと同様に [第六格や数は] 言葉 (vacas) が表したものである (66)。ṣaṣṭhīvacanabhedādir vivakṣāmātrasambhavi tato na yuktā vastūnām tatsvarūpavyavasthitiḥ // TS 570 // rūpādindīvarādibhyaḥ ityādāv āha ṣaṣṭhīyādi / yadi hi yathāhāvastu ṣaṣṭhīyādīnām pravṛtṭiḥ siddhā syāt, tadā bhavet tato vastusiddhiḥ yāvatā svatantrecchāmātrabhāvina ete, na bāhyavastugatabhedādyapekṣiṇāḥ, tat katham etebhyo vastusiddhiḥ tatra ṣaṣṭhī paṭasya rūpādaya iti, paṭo rūpādaya iti vacanabhedāḥ / ādigrahaṇād iha paṭe rūpādaya iti saptamī paṭasya bhāvaḥ paṭatvam iti taddhitotpattir ityādi parigrahaḥ // TSP 570 // 第六格 (ṣaṣṭhī 属格) や [単数と複数との] 数 (vacana, 文法上の数) の区別などは、話し手の意志 (vivakṣā) だけにおいてあり得るものである。それ（話し手の意志だけ）から諸の実在のその自性を確定することは不合理である (TS 570)。色などは青蓮華などから云々に対して第六格云々と答えている。なぜなら、もし第六格などの機能 (pravṛtti) が実在 (vastu) のままに成立するなら、そのとき、その限りそれ（第六格）から実在が成立しよう。これら（第六格や数の区別など）は [話し手の] 自らの意志だけを有するものであり、外界の実在に属する区別などに依存するものではない。したがって、どうしてそれら（第六格や数の区別など）から実在が成立しようか。その場合、第六格とは布の色などということである (paṭasya rūpādaya iti)。布、色などというのが [単数と複数との] 数の区別である。ādi という言葉からこの布に色などがあるという第七格 (saptamī 於格) があること、布の本質は布性という名詞を作る接尾辞 (taddhita) の起こりがあることなどを含むのである (TSP 570)。この TS 570 は TS 559 に示される〈地などと色、香などの区別を単数と複数との区別を根拠として論じる〉ニャーヤ学派の見解にシャーンタラクシタ、カマラシーラは、上のダルマキールティの PVSV 65, 66 を活用して論難するものである。(52) P48 b3 D74a3 rigs pa ma yin pa 'i phyir / (53) cf TSP ad TS 571 本稿注(10) (54) cf 本稿 1.2.b. AKv. p. 180, 24-30., NV p. 370, 3-5 ad NS 1-2-4 本稿注(10) (55) ここは、na vyapadiśyamānatvāt (述べられていない) であるが、P48b4, D74a4 sgra tha dad pa des brjod pa 'i phyir ro // によって読む。(56) prasevikā であるが prasevaka か (57) この部分は筆者には読解し得ない。(58) tada-bhāvapramāṇasādhakam pramāṇam であるが、P48b5, D74a5 de med par sgrub (D bsgrub) pa 'i tshad ma により読む (59) tha dad pa, nānā と読む (60) snod, bhājana と読む (61) P48b8, D74a7 ji skad bśad pa 'i rañ bshin yaṇ phan tshun tha dad pa yin pas khas blañ bar mi bya 'o // (62) P48b8 phyog gcig gis なおこの全体として、部分としてという点からの吟味は注(1)参照、他にダルマキールティによって示されるものは、PVIII 434。(63) 存在関係が不合理であることを拒斥の検証として示すものは、TSP ad TS 604-605 に見出される。prayogaḥ yad anekam na tad eka-dravyānugataṃ, yathā kaṭakuṭyādayo bahavo naikadravyānugataḥ / aneko cāmī tantukarādaya iti vyāpakaviruddhopalabdheḥ / atha vā yad ekaṃ tad ekadravyāśritam, yathaikaḥ paramāṇuḥ / ekaṃ cāvayavismṛjitaṃ dravyam iti vyāpakaviruddhopalabdhiprasaṅgaḥ / prasaṅgasādhanaṃ caiat / prayogadravye 'pi viparyaye bādhakam pramāṇam āha vṛtter ayuktir bādhikā prameṭi (v. 605) / avayaveṣu yā 'vayavino vṛtṭiḥ, tasyā ayogaḥ pramāṇair aghaṭanam,



tad atra bādhakaṃ pramāṇam // 多であるものは一なるドラヴィヤ (全体) に収まることはない。例えば、麦わら、小屋など多なるものは一なるドラヴィヤに収まることはないように。[論理的必然関係] それら糸や手など (部分) は多なるものである。[論理的根拠] [糸や手など (部分) は一なるドラヴィヤ (全体) に収まることはない。(結論)] 以上の推論は能遍と対立するものの認識に基づくものである。あるいは一なるものは一なるドラヴァヤに依存するものである。例えば、一なる原子のように。全体といわれるものは一なるドラヴァヤである。[全体は一なるドラヴィヤに依存するものである] 以上の推論は能遍と対立するものの認識に基づく帰謬である。これは帰謬による証明である。二つの推論に関しても、反[所証]において[立証因を]拒斥する検証が存在する。存在関係が不合理であることが拒斥の検証である (v. 605)。諸部分において全体には存在関係があるということは不合理であり、諸のプラマーナによって成り立たない。それが、この場合、拒斥の検証である。 (64) P49a2 ji ltar 'di tha dad pa 'i rañ bshin du rigs par 'gyur / Cf TS 612 yad vā sarvātmanā vṛttāv anekatvaṃ prasajyate / ekadeśena cāniṣṭā naiko vā na kvacic ca saḥ // TSP p. 252, 11-16 ad TS 612 evaṃ tāvat kṛtsnaikadeśavikalpam akṛtvā vṛttir apāstā / sampraty upādāya prajñptivihitena prakāreṇa vṛttiniṣedham āha yad vetyādi / kadācittad dravyaṃ pratyekam avayaveṣu sarvātmanā varttate ekadeśena vā yadi sarvātmanā, tadā yāvanto 'vayavāstāvantastasyātmānaḥ prāpnuvanti, na hi pratyavayavaṃ tasya svabhāvābhede 'sati sarvātmanā vṛttir asti asaṃvidyamānenātmanā vṛtṭyasambhavāt / tataś ca sarvātmanā vṛtter yugapad anekakuṇḍādivyavasthitakuvalādivad anekatvaṃ avayavinaḥ prāpnoti / (65) P49a2 yan lag can gyi (66) P49a2 dmigs pa 'i tshe により upalambhavelāyām と読む。なお総体 (全体) としてか、一部としてかという点から全体と部分との関係を論難することは、注(1)参照 (67) cf NV p. 471, 14-18 ad NS 2-1-32 parisamāpta (68) P49a2-3 yan lag can du ma la dmigs pa 'i sgo nas (69) P49a3 ma lus pa 'i yan lag can dmigs pa 'i sgo nas / (70) bhāsvara を P49a4 tshu rol, arvāk と見て tasyām arvāgmadhyabhāgānām と読む。cf AK p. 189, 16-24 madhyaparabhāgānām indriyenāsa m nikar śāt / (71) Cf PVś 船山 (1990) p. 617., MAK10 (72) Cf TSP p. 252, 16-18 ad TS 612 athaikadeśeneti pakṣaḥ, tadā 'navasthā syād ekadeśānām / tathā hi yair ekadeśais tad dravyam avayaveṣu varttate te 'pi tasyaikadeśā iti teṣv apy anena varttitavyam, tathaivāpareṣv ity anīṣṭhā / (73) P49a5 rkañ pa 足 Cf TSP p. 252, 21-23 ad TS612 evaṃ hi saty eko 'vayavi na syāt avayavapracayamātrarūpatvāt tasya / tathā ca sati dṛṣṭpānyādis-amudāyamātrātmaka evāstāṃ vastu, kim aparais tasya svātmabhūtair avayavaiḥ parikalpitaiḥ / (74) P49b2, D75al dmigs pa (75) cf 本稿1.2.a. NBh, NV <2> AKv p. 342, 19-28., PVSv p. 41, 1-3 戸崎 (1985) p. 212 fn. 361 (76) 多なるものが一なる結果を生み出すというダルマキールティの理論は多様なものが簡潔に単一な言葉で表現されることの有効性も意味している。cf TS 580-581 ekakāryopayogitvajñāpanāya pṛthakśrutau / gauravāśaktivaiphalgadoṣatyāgābhivāñchayā // 580 // sākalyenābhidhānena vyavahārasya lāghavam / manyamānaiḥ kṛtā yeṣu vāg ekā vyavahartṛbhiḥ // 581 // 同一の目的 (kārya) に寄与することを知らしめるために、別々に (pṛthak) 聞かれる場合、冗長さ (gaurava)、無能力 (aśakti)、無益 (vaiphalya) という過ちを捨てることを願 (abhivāñchā) って (580) [布と] 全体 (sākalya) 的に表現すること (abhidhāna) によって言語表現の簡明 (lāghava) を目指す話し手 (vyavahartṛ) たちによって、それら (諸の糸) に関して [布という] 単一な言葉 (vāc) が設けられている。 (581)

(もりやま せいとつ 仏教学科)

2013年11月15日受理